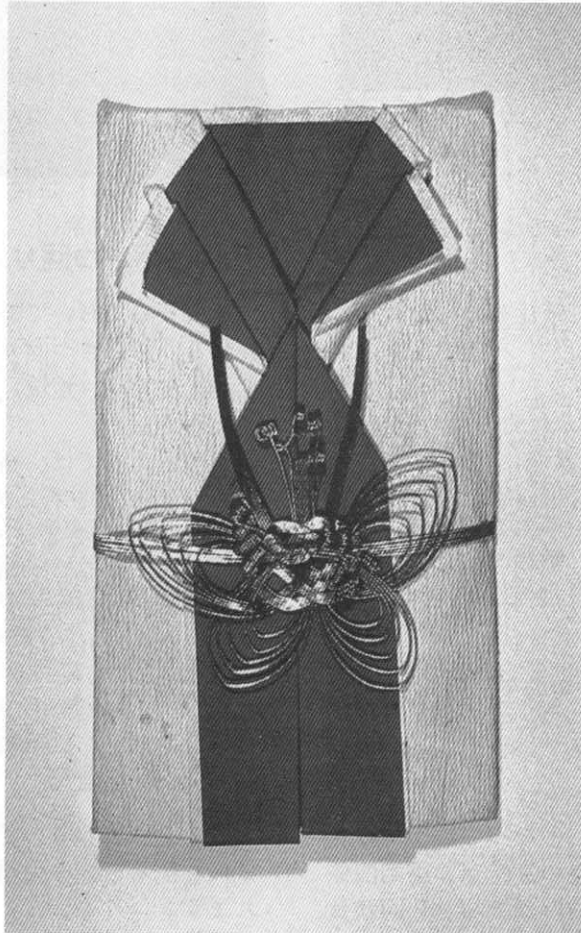


祝いごとの民俗



3月21日から5月6日まで企画展「祝いごとの民俗」を開催します。

私達の身の回りには「祝う」ことがなんと多いことでしょうか。人生、誕生に始まって死に至るまで、その成長のつとに「祝いの行事」を行います。また、年中行事では生産・生業の安全と豊饒を祈願した「祝いごと」が毎年のように繰り返されます。

ところが、種々「祝いごと」が、余りにも身近に過ぎるため、私達は本来の「いわう」という意味を忘れてはいないでしょうか。

「いわう」という日本語の意味には、「祝う」=めでたいことを喜ぶ、祝福するという意味

と、「斎う・忌う」=謹んで神をまつる、神に祈り、願うという意味がありますが、後者を忘れてしまったのが現在の「祝いごと」ではないかと思えます。

時代と共に、日々生活習慣も変貌してゆく今日です。本企画では、郷土で伝統的に行われてきたさまざまな「祝いごと」を取り上げ、それに用いられた道具や儀式(民俗)の中に、「いわう」という意味を探ってみました。

(次頁へ続く)

*写真は「祝いごと」を象徴する結納の「水引」です。

祝言

祝言（シュウゲン）は人生上の最大の祝いごとです。

祝言は嫁入り婚における「婚姻成立儀礼」を指します。三島あたりでは「嫁入り」日当日の諸儀礼をシュウゲンと称しています。

祝言の限定した使い方には、夫婦杯をかわすことや、その際の杯を、シュウゲンとかシュウゲンの杯などと呼び、これを祝言とする地域も見られます。

しかし、一般的には、儀礼そのものよりも「披露宴」を指してシュウゲンとする地域が多いようです。

現在では、「祝言に招かれた」という人は多くなく、「結婚式の披露宴に招かれた」という言い方が普通になっています。

■ 結納

「嫁入り婚」における婚約の確定を意味する儀礼です。

現在では、金銭のほか、するめ、昆布など5品目か7品目を婿方から嫁方に仲人によって届けられるのが習わしとなっています。

しかし、本来の結納品の意味は、婚姻関係を結ぶ両家が新しく姻戚関係を結ぶ共同飲食の酒肴を指したもののようです。

すなわち、結納で贈られる品々は、両家を結ぶ「ユイモノ」であったわけです。



▲ 結納



▲ 祝言

■ あいさつ回り

嫁入り婚において婚礼成立式に先だって行われる「あいさつ回り」は、嫁にとっても嫁を迎えるムラ（地域）にとっても重要な儀式となりました。

三島あたりでは、婚家の者に導かれて「あいさつ回り」を行ったものですが、その際「ルスバン（留守番）をもらいました」と言いながら、紹介して回ったものだそうです。

あいさつを行うことによって、ムラの一員として認められ、「つきあい」が始められたものでした。

■ お茶を配る

嫁の近所まわりの際に、オオバッチャ（番茶）を配るという習慣が、函南町桑原で見られます。

茶袋に番茶を入れて持ち歩き、あいさつが済んだところで、ひとつまみずつの茶を配るものであるが、将来の親しい関係を願う「近付きのしるし」であろうと思われます。



▲ あいさつ回り

祝いの行事と食べ物

■ 鯛

鯛はめでたい魚の代表とされ、さまざまな祝いの膳に出てきます。一般に、鯛は「めでたい」の「たい」に通じるからだと言われますが、理由はそうした語呂合わせだけでなく、その姿・色、味などが最も優れているからであろうと思われます。

祝言の宴に出された鯛は「くずし魚の皿」に身をほぐして盛られ、出席者全員に食べてもらうという習慣がありました。(函南町)

今でも、祝言のヒキモノ(引き出物)のごちそうには、必ず鯛が入っています。

また、本陣の「大名料理」にも、「鯛の浜焼」は付き物でした。

■ 海老

海老も祝いの食膳にかならず上ります。

海老は文字通り「海の老人のたとえから長寿を祝う」とされ、めでたい行事に用いられるようになったといわれます。

正月の行事に使われる伊勢海老は、茹であがった見事な赤といい、甲羅や触角の立派な姿が「めでたさ」を象徴するものだといわれます。

現在は玄関の正月飾りにも、作り物の海老を飾る習慣が見られます。

■ 赤飯

赤飯は、古代米の「赤米」に由来し、さまざまな祝いの行事に作られるようになったと言われる説があります。

この地域では「オコワ」という呼称が一般的で、3月の節句、5月の節句や人生の種々成長儀礼のめでたい食卓に上ります。

赤飯の赤い色は邪気を払い、厄除けの力を持つと信じられているところから、祝いごとやその他の行事に用いられるという説もあります。

『和漢三才図会』には「コワメシ」(強飯)として、「赤飯」と「白蒸し」を区別していますが、昔から吉事の赤飯と仏事の白蒸しと決められていたようです。



▲ 立ち餅

■ 餅

種々祝いごとや年中行事に餅は欠かせません。餅は人間と神が共に食卓を囲む場合の食べ物でした。

最大の年中行事の正月準備は暮れのうちから始められます。中でも「餅つき」は重要でした。この地域は「クンチモチ」(29日に餅をつくこと)を忌む習慣があり、28日或いは30日に餅つきを行います。九は「苦」に通じるといふことのようにですが、本来は神聖な「餅」を吉日に準備したいとする願いからです。ついた餅は「鏡餅」と「雑煮」用の餅に分けられ、正月を待ちます。

正月のほか、二番正月や雛節句、氏神祭りなど、「餅をつく日」は一年のうちに数多くあります。

また、子供の成長を祝う「歯固め」にも餅をつき、これを背負わせて祝ったものです。



▲ 強飯 (『和漢三才図会』)

「ふるさと講座」

報 告

女性を対象とした「ふるさと講座」が今年も4回にわたり実施されました。

「三島」について多方面から学んでもらおうという主旨で始められた講座ですが、歴史の流れの中から、又広い生活圏から今の時代・生活を見つめ直すということで、今年のカリキュラムが組まれました。

会場の都合で、25人募集したところ、82人もの応募があり、抽選で決めました。

それぞれの講師の尽力で、受講者には、新しい発見・出逢いが多くあったようです。これにより、地域・生活への見方が深まり、得たものが、少しでも家族や友人に伝えられ広まれば有難いと思います。

(1) 講座「新しい信長 像」

11月12日 講師 長谷川 福太郎 氏

先生はまず、「三島の女」が数多く育ってもらいたいと話されました。つまり「三島をよく知り」「三島をこよなく愛し」「文化財を守り伝えていく」女性です。先生の三島に対する熱い思いが、全員に伝わってきました。

次いで、歴史というものは、「ありそうなのそ」と「なさそうなほん」とがあり、織田信長の桶狭間へのルートの通説が、新資料の発見により、ありえないと思われていた道が真実であったことを詳細に話されました。又、信長の考え方・行動の新しさについて、いろいろな例を取りあげ、「中世において、近代的な頭であった」と評価され、暴君と思われていた信長像をくつがえし、すぐれた指導者として解明されました。



▲「三島の女」を育てたいと語る長谷川先生

(2) バスハイク「晩秋の天城路を往く」

11月26日 講師 望月 一夫 氏

三島から下田街道を南へ下った伊豆の奥座敷、天城湯ヶ島町の晩秋の自然と、近代文学者達の足跡を訪ねました。

山間ののどかな温泉場湯ヶ島を愛した文人達が、明治以後、数多く逗留しており、町内には、ゆかりの宿や文学碑があちこちに残っています。

川端康成が「伊豆の踊り子」を執筆した湯元館、「檸檬」の梶井基次郎が長く滞在した湯川屋と近くに建てられた文学碑・檸檬塚など、地元の方々が誇りとし、大切に守り伝えられていました。この外、旅の歌人若山牧水の歌碑、大仁の歌人穂積忠の歌碑、少年時代を湯ヶ島で過ごした井上靖の生家跡や墓所・文学碑など、小さな町のあちこちに文学の香りがただよっています。

自ら、俳句を詠まれる望月先生は、こうした湯ヶ島と文人達との関わりとたんねんに調べ、案内されました。



▲若山牧水歌碑より、湯ヶ島を見下ろす(右端が望月先生)



▲沢地の唯念名号碑について語る野村先生

また、伊豆の踊り子達の歩いた天城旧街道を旧天城トンネルまで散策しながら、ぶな等の植生・いのししなどの動物・地層・古道や峠など、天城にまつわる多岐にわたる話を伺いました。

参加者は、桃源郷のような湯ヶ島に文人達同様、親しみと感じたようです。

(3)史跡めぐり「民間信仰の跡を訪ねて」

12月2日 講師 野村 凱一氏

三島市誌増補版で民俗を担当された野村先生に、市内に残る民間信仰を伝える石造物を案内していただきました。

道祖神・馬頭観音・地藏・庚申塔などの地域の信仰を伝えるもの、伊豆八十八ヶ所霊場外の札所・遊行僧（徳本行者・唯念行者）の六字名号碑等が残されている、寺や神社・お堂など13ヶ所を回りました。

移転されたものもいくつかありましたが、どこも周囲をきれいに掃除されており、長い信仰が息づいているのが感じられました。



▲のし棒でのす

(4)「故郷の味一手打ちソバをつくる」

12月10日 講師 勝又信子氏・勝又きん氏
(於 働く婦人の家)

素朴な庶民の味・ソバの伝統について学習し、ソバ作りの実習を行いました。

初めに郷土館の杉村学芸員より「ソバの歴史と民俗」の詳しいお話を聞きました。5世紀頃にはすでに栽培されていたソバが、今のソバ切りの食べ方になったのは江戸時代に入ってからのこと、ハレの日の特別の食べ物となっていったそうです。

次いで、裾野市葛山で長年手打ちソバを打ち続けている、勝又先生達の指導で、手打ちソバに挑戦しました。

水を一切使わず、小麦粉・ソバ粉・山芋・玉子だけで、まとめるのが勝又家流。よくこねた生地を台の上でのし棒でよくのばします。この時、均一の厚さにのばすのが難しいようです。打ち粉をしてたたみ、同じ太さに切ります。たっぷりの湯をわかし、沸騰したところへソバを入れ、2回ほどさし水をしませます。

ゆで上がったソバはよく水洗いをして、ぬめりを取り、水けを切ります。

こうして出来たソバをにんじん・しいたけ・鳥肉を煮込んだつけ汁でいただきました。打ちたてのソバはさすがにおいしく、またソバ打ちに挑戦したいという声も、かなり聞こえました。

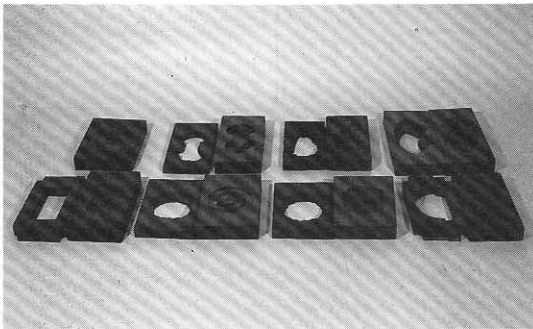
懇談の中で、材料の選び方・打ち方・ゆで方のコツなどの質問がいろいろありましたが、先生達がていねいに答えて下さいました。



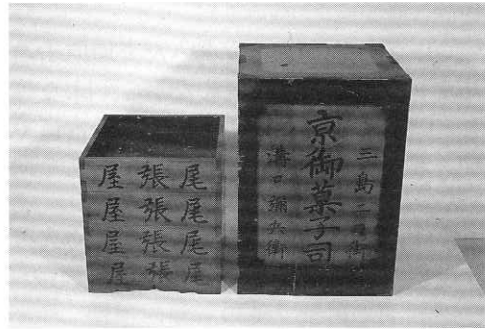
▲ソバ作りのコツを語る(左 勝又信子さん、右 勝又きんさん)

■資料収集状況

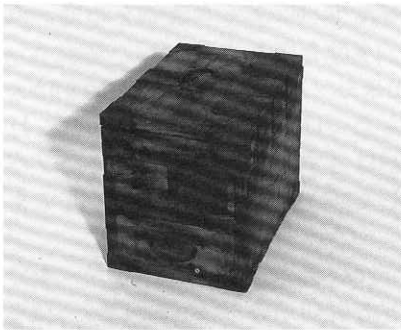
採集月日	提供者 氏名	住 所	資 料 名	数
H. 5. 2. 17	溝 口 健次郎 氏	市内東本町 1 - 16 - 34	菓子木枠	1 式
〃	〃	〃	菓子箱	2 組
〃	〃	〃	神棚 (板)	1
〃	〃	〃	硯箱	1
〃	〃	〃	菓子箱	3
〃	〃	〃	角火鉢	1
〃	〃	〃	弁当箱	1 組



▲菓子木枠



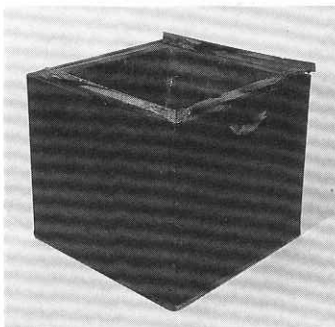
▲菓子箱



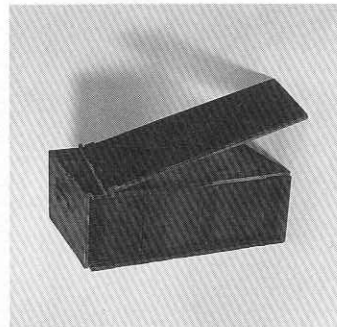
▲硯 箱



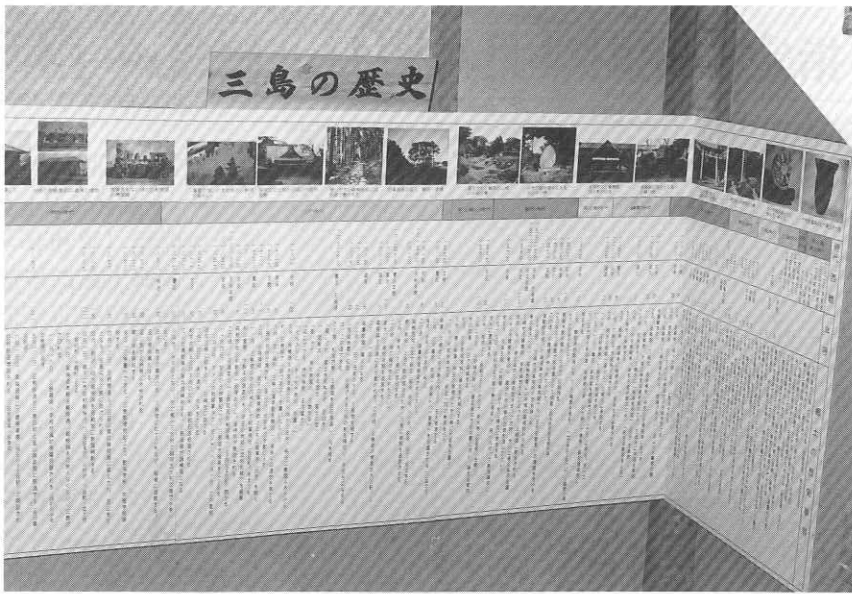
▲菓子箱



▲角 火 鉢



▲弁 当 箱



常設展示 年表「三島の歴史」の設置

このたび郷土館では、1階から2階への階段踊り場に年表「三島の歴史」を設置しました。

この年表を紹介しますと、木製の材質で、寸法は全長700cm×高さ180cmと大型に出来ています。

その内容は、先土器・縄文時代より今日に

至るまでの時代・西暦・年号及び郷土三島に関する主要な歴史事項が載せてあります。また上段には、郷土の歴史事項に対比させた写真を載せました。

これらにより、三島の歴史が一目でわかり三島を学ぶ参考になります。

郷土館に来館の際には、ご覧下さい。

企画展「古代瓦展」報告

平成4年11月1日～平成5年1月17日に開催された企画展「日本文化を探る－古代瓦展」が終了しました。

駿府博物館（静岡）所蔵の徳富コレクション古瓦を中心に、伊豆国分寺瓦等、伊豆の古代寺院瓦を展示しました。

これらの瓦から、古代日本と大陸との密接な交流や、伊豆に花開いた仏教文化の一端をかいま見ることができました。

展示に協力下さった皆様に厚くお礼申し上げますと共に、簡単な報告をさせていただきます。

■展示内容

(1)伊豆国分寺・国分尼寺外、三島・伊豆の古

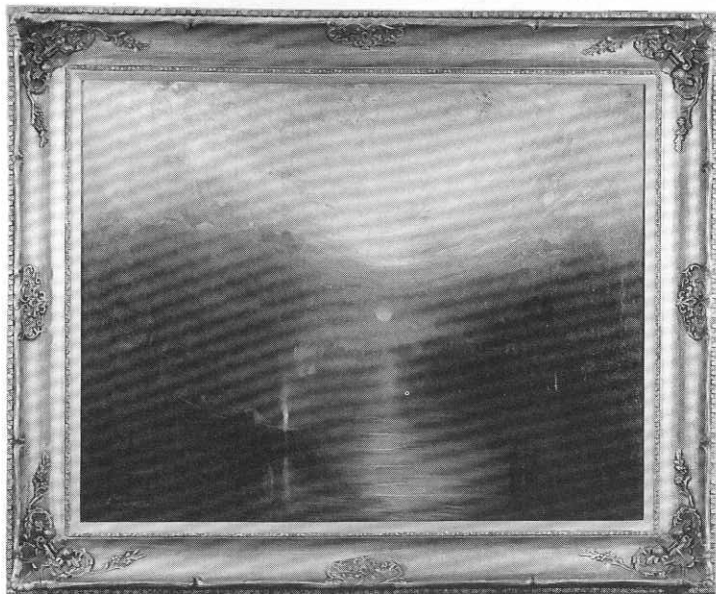
代寺院瓦

- (2)大陸（中国・朝鮮）の古代瓦
- (3)日本の古代瓦・国分寺瓦
- (4)日本の中世瓦（安土城・銀閣寺外）
- (5)文字瓦（武蔵国分寺文字瓦他）

■入館者数

月(開館日数)	11月 (30日)	12月 (25日)	1月 (14日)	合計 (69日)
学 生 (小・中・高)	2,705	596	1,365	4,666
一 般 (個人)	6,120	2,170	2,510	10,800
団 体 (30人以上)	1,011 (18)	280 (6)	199 (3)	1,490 (27)
合 計	9,836	3,046	4,074	16,956

市指定文化財「月島の月」修復終了する



*注1 栗原忠二

明治19年(1886)三島市中央町に生まれた。東京美術学校で和田英作、そして英国の巨匠ターナーの作風に傾倒し、その強い影響を受けた。「栗原ターナー」といわれる程、ターナーに心酔した彼は、日本の風景画に新境地を開拓した。そのロマン主義的な風景は、今日でも新鮮な輝きを放っている。

*注2 「月島の月」(油彩) 写真

昭和55年、市指定文化財となる。

隅田川河口の落日の情趣を描いた第12回白馬会展の入選作で、まだ22歳であった栗原忠二の出世作である。

画面中央の太陽は赤々と円弧状に空を染め、水面に光を投げてまさに没しようとするところ。この作品は他の作品には見られない重厚なしかも燃えるような若々しい感情があふれている傑作である。

■ 休館日変更のお知らせ ■

平成5年4月1日より、楽寿園の休園日変更に伴い、休館日は毎週月曜日(祝日の時は翌日)及び12月27日～1月2日となります。ご承知下さい。

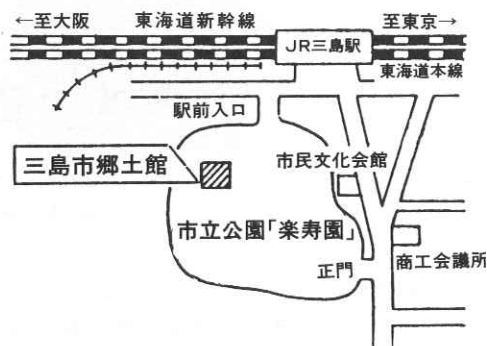
市指定文化財、栗原忠二(注1)作、「月島の月」(注2)は、郷土館開館(昭和46年)当時、南小より郷土館に移管されたもので、過去昭和59年企画展「三島の文化財展」等に展示しました。

しかし、絵の具のはく離や亀裂、キャンパスの伸縮等損傷が著しいため、市の貴重な文化遺産として保存し、今後も来館者に鑑賞してもらうため、専門業者に修復を委託したところ、2月に修復が完了しました。

7月からの企画展「郷土の画家たち」に展示する予定です。来館の際には、是非ご覧下さい。

利用案内

休館日 毎月第2月曜・12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料(但し、楽寿園入園の際、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土館だより No.45

平成5年3月15日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 0559-71-8228
FAX 0559-81-3730
発行 三島市教育委員会